

俳句雜誌

空

空

令和二年八月廿日発行

第1181号

定価300円



2020・1

SORA 88号

直方 石橋幾代

もう夫の名無き形代流しけり
 雨三日華やいでゆく菊人形
 ぎらぎらの日向を走る羽抜鷄
 秋風や手帳に記す死後のこと
 落葉掃く僧に鶏ついてまはる

北九州 河原敬子

雁渡し手に載るほどの仏欲し
 十人で満員の寺門茶受く
 閻王の左右に書記や秋深し
 閻王にも光背のあり秋土用
 寂しければからだ動かし草の花

岡垣 田中とし江

瀬しぶきの子の声高き夏休み
 元冠の海に浮輪の色あまた
 托鉢の僧の隈なき日焼かな
 秋風や体重測る象きりん
 台風の去りし夜明けの星あまた

大宰府 山本則男

文旦を置けば部屋ごと丸くなる
 猪垣の中に祭の始まりぬ
 鼓打つたび月光の震へけり
 ひとところ水を束ぬる下り籜
 鉦叩素直な闇となりにけり

熊本 松田明子

畦道の闇美しき虫送り
 鳴り物が闇を押しゆく虫送り
 神楽終へ息づく大蛇畳まるる
 馬役の引つ立てらるる村芝居
 ポケットも柄も大きなサンドレス

粕屋 吉田 葎

新生姜末広がり束ねらる
 顔ぢゆうに藁くづを浴び稲を干す
 村を守る砦のごとく稲架襖
 顔入れて鳥は熟れ柿つつきをり
 枯菊のこんがらがつて立つてをり

千葉 原友子

塔婆持つ人歩きをり稲の花
 何もかも赦して熱き茗荷汁
 土寄せの土に火照りや鳥渡る
 辛抱の極みの色か吾亦紅
 ひまはりの自暴自棄なる種を採る

糸島 小林朱夏

サイレンに続く遠吠え原爆忌
 稲雀遅れ飛び立つ五羽六羽
 菊の香や女盛りは疾うに過ぎ
 虎落笛うつすら開く死者の口
 一晚で裸となりし大樹かな

福岡 栗原京子

工房は戦のせめく山笠準備
飾山笠炎燃え立つ本能寺
三日経て浮き出る打撲半夏生
湯舟てふ極楽のあり田植終ふ
子ら海へ突撃したる海開き

北九州 横田敬子

夕風や砂となりゆく貝の殻
錆びつきしトタンの匂ひ柿の花
墓はみな洗礼名持ち夏の蝶
朝採りの西瓜に残る陽の温み
たつぷりと清酒を注ぎ井戸浚へ

北九州 兒玉充代

もの食べて怒りうするる溽暑かな
百日紅揺れをさまりてさらに紅
灯明にことなる祈り盂蘭盆会
研屋の灯ひくく点して秋の雨
焼印の濃き饅頭や虫の夜

福岡 あさなが捷

白鷺の水面砕きて飛びたてる
稲の香や自転車を押すかへり道
獣道入れ全山の紅葉かな
朝霧や柵をはみ出す牛の貌
そこだけに光集むる冬蔵

粕屋 秋千晴

風鈴の音のしてより海の風
後ろより手を貸す父とボート漕ぐ
終りには犬までの的に水鉄砲
難しき貌で突つ立つ鶏頭花
七五三はだけてくぐる大鳥居

須恵 苑実耶

立冬や音たてて掃く寺の庭
朝より全き空や冬木の芽
船に沿ふ海豚の群れに飽きにけり
縦走の叶はぬ山や懐手
後ろ手に引き戸を閉むる雪女

福岡 山内碧

引力の無き世のごとく水馬
引けば逃ぐる届きさうなる烏瓜
手術にも馴れてしまひぬ今朝の秋
秋の昼廊下曲がれば手術室
晩年の母の気弱や白槿

福岡 永淵恵子

村中に祭囃子が行きわたる
斬られたる後笛方に村芝居
少しのぞくお七の臍毛村芝居
村まつり七十代はまだ若手
村まつり予算すべてを使ひきり

空集抄——柴田佐知子抽出

鞍はづし鞍のかたちの馬の汗

深川 淑枝

穴に入る蛇に鎮守の笛太鼓

戸栗 末廣

夜学子の忘れ物ある机かな

吉田 菫

かうなれば老い切るまでよ蝮酒

角野 良生

千の灯のひとつに揺るる踊りかな

松田 明子

何もかも大ぶり浦の施餓鬼棚

永淵 恵子

引揚げの船より万緑の祖国

山内 碧

草刈れば去年忘れし銚あり

河原 敬子

赤ん坊の臍に接吻柚子湯の香

中田 みなみ

息かくるだけで桔梗ひらきさう

岸 洋子

月代や岸滑らせて舟を出す

高倉 和子

月明やひとり棲む家舟のやう

坂口 晴子

透けてゐる胸は角材案山子立つ

曾根 富久恵

地下足袋にこぼれて紺の芋の露

原 友子

物置を丸ごと処分秋深し

田代 貞香

台風や夫との会話やや増ゆる

仲里 奈央

夕立の横一列に来りけり

小島 翠波

檻のドアノックする猿秋暑し

青木 朋子

水平に海垂直に鷹柱

山本 則男

緑蔭に人を待ちゐる採血車

兒玉 充代

熱帯夜殺意を誘ふ羽音かな

宮川 正彦

消えし文字消えし言葉や敗戦忌

今井 康子

鶏頭の小さき狼煙のごと立てり

星加 鷹彦

露地の子はいつも小走り金魚草

山田 正子



ヘルメット外して盆の僧になる

秋 千晴

大柄な若者そだち敗戦忌

森田明成

妹なほも甘え上手や蝉しぐれ

西住三恵子

満月や妣の写真を濡れ縁に

林 徹也

幼子の嘘聞き流す花火の夜

大西乃子

地球儀の小さき日本菊日和

苑 実耶

梅雨茫々欠航ランプ回転す

田中とし江

罪を負ふごと炎昼を歩みけり

石橋幾代

里神楽面に恋してしまひけり

小林朱夏

露草や一筆箋に足る近況

田岡千章

仰向けの蝉を動かす通り風

田中素直

新聞を読むに腹這ふ今朝の秋

井上和子

月の道山門を抜け本堂へ

立花一枝

かはほりやヒロシマに川いく筋も

えとう樹里

幼子のファーストシューズ小鳥来る

岡村尚手

八朔やのらりくらりと風見鶏

押田裕見子

車から犬が顔出す夏休み

後藤園子

二、三粒足して隣家へ栗おこは

三井所美智子

塩舐めて殊に残暑の町工場

松尾康代

朝顔鉢抱へ一斉下校かな

あさなが捷

辛き事日記に書けぬ夜長かな

むつみ蓮

今日の月中有の父も見てをらむ

石井みゆき

絵日記の入道雲に目鼻あり

窪みち子

赤子泣く庭に大きな月が出て

田口萬智子

嫁ぎたる友の里より今年米

松井順子

納屋の戸を開くれば止みぬ虫の声

横田敬子



空集作品評

柴田佐知子

ドンヒヤララ 朝から聞こえる笛太鼓―句を読むや、唱歌「村祭」が流れてくるからだ。蛇は「ドンドンヒヤララ」とご機嫌で穴へと消えていったことであろう。

夜学子の忘れ物ある机かな

吉田 菫

鞍はづし鞍のかたちの馬の汗 深川 淑枝
騎乗の人と一体となり鬣をなびかせ走っていた馬は、強い夏の日差しの中に美しく輝いているだろう。鞍をはずした瞬間を活写。中七下五は「鞍のかたちの馬の汗」と名詞と助詞のみで構成されており潔い。殊に「馬の汗」という具象で強く言いとめたところが秀抜だ。命の脈動が伝わってくる。

穴に入る蛇に鎮守の笛太鼓

戸栗 末廣

蛇は苦手で、家に住みつく大きな青大将が庭の木から下りて床下に消えて行ったときは、身がすくんで動けなくなった。思い出すだけでも鳥肌が立つのだが、掲句の蛇は何だか楽しい。「鎮守の笛太鼓」の効果だ。一村の鎮守の神様の今日はめでたい御祭日「ドンドンヒヤララ ドンヒヤララ ドンドンヒヤララ

かうなれば老い切るまでよ蝮酒

角野 良生

自らの「老い」を直視して、開き直ったふてぶてしさが小気味良い。「かうなれば」も効いている。

赤ん坊の臍に接吻柚子湯の香

中田みなみ

湯上りの赤ん坊に服を着せるとき、まるいお腹に接吻しているおばあちゃんの姿は何度も見たことがある。健康的で幸せな句である。

空集

柴田佐知子選

鞍はづし鞍のかたちの馬の汗

北九州

深川淑枝

夕立去り馬の香強き野末かな

草の乳手にねばりある秋暑かな

稲の香の闇ふつくらと波の音

流木を焚けば潮の香鳥渡る

はんだぎの眠りジュラ紀にゐる思ひ

もの言つてこゝろらがへる残暑かな

広島

戸栗末廣

竹を伐るみづうみの空晴れわたり

湖は日に芒は風にかがよへる

墓山の日暮れは早し法師蟬

穴に入る蛇に鎮守の笛太鼓

まづ蜘蛛の糸を外しぬ松手入

火を水を交互に浴びて荒御輿

柏屋

吉田 菫

コスモスや地平線まで減反地

束の間も母は休まず小六月

秋の蚊の打たれてもなほ人に寄る

夜学子の忘れ物ある机中かな

丁寧の前掛けたたみ魂送り

泳ぎけり太平洋をかきまぜて

新聞の散らかつてゐる昼寝覚

その中に柩となりし蟬の殻

いつもこの石打水の終ひ水

浅き息して熱風の中にをり

かうなれば老い切るまでよ蝮酒

摺り足の進みて低き踊唄

熊本

松田明子

のけぞりて頭巾乱るる踊りかな

千の灯のひとつに揺るる踊りかな

ゆつくりと手足組み立て昼寝覚